

夏目漱石

写生文



写  
生  
文



写生文の存在は近ごろようやく世間から認められたようであるが、写生文の特色についてはまだ誰も明瞭に説破<sup>せつぱ</sup>したものがおらん。元来存在を認めらるるということはすでに認められるだけの特色を有しているという意味にすぎんのだから、存在を認められる以上は特色も認められたわけに相違ない。しかし認めらるるというのは説明されるとは一樣でない。桜と海棠<sup>かいどう</sup>の感じに相違のあるのは何人も認めている。その相違を説明しろといわれ

るとちよつとできにくい。写生文と普通の文章の差違は認められているにもかゝわらず明らかに道破あきされておらんのもこの理である。かの写生文を標榜ひょうぼうする人々といえども単にわが特色を冥々めいめい裡に識別するといふまでで、明あきかに指摘したものは今日に至るまで見当らぬようである。虚子きよし、四方太しほうたの諸君はおりおりこの点に向つて肯綮こうけいにあたる議論をされるようであるが、余よの見るところでやはり物足らぬ心持こころもちがする。余のいうことも諸君から見れば依然として物足らぬかもしれぬ。しかし言わぬより参考になると思う。単に写生文を生命とする諸君の参

考になるのみならず、ひろく文章に興味を有する人々の耳にはあるいは物珍めずらしく聞えるかもしれない。

写生文と普通の文章との差違を算かぞえ来きたるといろいろある。いろいろあるうちで余のもっとも要点だと考えるにもかゝわらず誰も説き及んだことのないのは作○者○の○心○的○状態である。他の点はこの一源泉より流露するのであるから、この源頭に向むかって工夫を下せば他はことごとく刃を迎えて向うから解決を促うながすわけである。

社会は人間の塊かたまりである。その人間を区別すればいろいろできる。貴と賤ともなる。賢と不肖ともなる。

正と邪ともなる。男と女ともなる。貧と富ともなる。老と若、長と幼ともなる。その他いろくくに区別ができる。区別ができる以上は、区別された一のもものが他を視る態度は、一のうちにある甲が、同じく一のうちにある乙を視る態度とは異ならなければならぬ。人生観というとき堅苦しく聞える。なんだか恐ろしくて近寄りにくい。しかし煎じつめればこの態度である。隣りの法律家が余を視る立脚地は、余が隣りの法律家を視る立脚地とはおのずから違う。大袈裟な言葉でいうと彼此の人生観が、ある点において一様でない。というにすぎん。



人事に関する文章はこの視察の表現である。したがって人事に関する文章の差違はこの視察の差違に帰着する。この視察の差違は視察の立場によって岐れてくる。するとこの立場が文章の差違を生ずる源になる。今の世にいう写生文家というものの文章はいかなることをかいても皆共有の点を有して、他人のそれとは截然せつぜんと区別のできるような特色を帯びている。するとこれ等の団体はその特色の共有なる点において、同じ立場に根拠地を構えているというてよろしい。もう一遍いっぺん大袈裟な言葉を借用すると、同じ人生観を有して同じ穴から隣りの御嬢さ

んや、向うの御爺さんじいを覗のぞいているに相違ない。この穴を紹介するのが余の責任である。いなこの穴から浮世を覗けばどんなに見えるかということの説明するのが余の義務である。

写生文家の人事に対する態度は貴人が賤者を視るの態度ではない。賢者が愚者を見るの態度でもない。君子が小人を視るの態度でもない。男おとなが女こどもを視、女が男を視るの態度でもない。つまり大人が小供こどもを視るの態度である。両親が児童に対するの態度である。世人はそう思うておるまい。写生文家自身もそう思うておるまい。しかし解

割すればついにこゝに帰着してしまふ。

小供はよく泣くものである。小供の泣くたびに泣く親はきちがい氣違である。親と小供とは立場が違ふ。同じ平面に立つて、同じ程度の感情に支配される以上は小供が泣くたびに親も泣かねばならぬ。普通の小説家はこれである。彼等は隣り近所の人間を自己と同程度のものみと見倣なして、擦つたもんだの社会に吾われ自身も擦つたり揉もんだりして、あくまでも、その社会の一員であるという態度で筆を執る。したがって隣りの御嬢さんが泣くことをかく時は、当人自身も泣いている。自分が泣きながら、泣く人

のことを叙述するのとわれは泣かずして、泣く人を覗いているのとは記叙の題目そのものは同じでもその精神はたいへん違う。写生文家は泣かずして他の泣くを叙述するものである。

そんな不人情な立場に立って人を動かすことができるかと聞くものがある。動かさんでもいゝのである。隣りの御嬢さんも泣き、写す文章家も泣くから、読者は泣かねばならん仕儀しぎとなる。泣かなければ失敗の作となる。しかし筆者自身がぼろ／＼涙を落して書かぬ以上は御嬢さんが、どれほど泣かれても、読者がどれほど泣かれな

くても失敗にはならん。小供が駄菓子だがしを買いに出る。途中で犬に吠えほられる。ワーと泣いて帰る。御母おつかさんがいっしょになってワーと泣かぬ以上は、傍人が泣かんでも出来損できそこないの御母さんとはいわれぬ。御母さんは駄菓子を犬に取られるたびに泣きうるような平面に立って社会に生息しておられるものではない。写生文家は思う。普通の小説家は泣かんでもものを泣いている。世の中に泣くべきことがどれほどあると思う。隣りのお嬢さんが泣くのを拝見するのは面白おもしろい。これを記述するのも面白い。しかし同じように泣くのは御免蒙ごめんもちりたい。だからある

男が泣くさまを文章にかいた時にたとい読者が泣いてくれんでも失敗したとは思わない。むやみに泣かせるなどは幼稚だと思う。

それでは人間に同情がない作物を称して写生文家の文章というように思われる。しかしそう思うのは誤謬ごびゆうである。親は小児に対して無慈悲ではない、冷刻でもない。むろん同情がある。同情はあるけれども駄菓子を落した小供とともに大声を揚げて泣くような同情は持たぬのである。写生文家の人間に対する同情は叙述されたる人間とともに頑がん是ぜなく煩悶はんもんし、むたいに号泣し、直角に跳躍

し、いっさんに狂奔する底ていの同情ではない。傍はたから見て  
気の毒の念に堪たえぬ裏に微笑を包む同情である。冷刻で  
はない。世間とともにわめかないばかりである。

したがって写生文家の描くところは多く深刻なもので  
ない。いないかに深刻なことをかいてもこの態度で押し  
てゆくから、ちよつと見ると底まで行かぬような心持こころもち  
がするのである。しかのみならずこの態度で世間人情の  
交渉を視るからたいいの場合には滑稽こっけいの分子を含んだ  
表現となつて文章のうえにあらわれてくる。

人によると写生文家のかいたものを見て世を馬鹿ばかにし

ているという。茶化ちやかしているという。もし両親の小供に  
対する態度が小供を馬鹿にしている、茶化しているとい  
い得べくんば写生文家もまたこの非難を免まぬかれぬかもし  
れぬ。多少の道化どうけたるうちに一点の温情を認めえぬもの  
は親の心を知らぬもので、また写生文家を解しえぬもの  
であろう。

このゆえに写生文家は地団太じだんたを踏む熱烈な調子を避け  
る。かかる狂的の人間を写すのを避けるのではない。写  
生文家自身までが写さるる狂的な人間と同一になるを避  
けるのである。避けるのではない。そこまで引き込まる



る事が可笑しくできてにくいのである。

そこで写生文家なるものは真面目に人世を観じておらぬかの感が起る。なるほどそうかもしれぬ。しかし一方から見れば作者自身が恋に全精神を奪われ、金に全精神を捧げ、名に全精神を注いで、そうして恋と金と、名を求めつゝある人物を描くよりも比較的に真面目かかもしれぬ。描き出ださるべき一人に同情して理否も、前後も弁えぬほどの熱情をもって文をやる男よりもたしかなところがあるかもしれぬ。

わが精神を編中の人物にいちずに打ち込んで、その人

物になり済<sup>す</sup>まして、恋を描き愛を描き、もしくは他の情緒を描くのは熱烈なものができるかもしれない。いかにも余裕がない作が現<sup>あらわ</sup>れるに相違ない。写生文家のかいたものにはなんとなくゆとりがある。逼<sup>せま</sup>つておらん。屈<sup>くつ</sup>托<sup>たく</sup>気が少ない。したがって読んで暢<sup>の</sup>び暢<sup>の</sup>びした気がする。まったく写生文家の態度が人事を写しゆく際に全精神を奪われてしまわぬからである。

写生文家は自己の精神のいくぶんを割<sup>さ</sup>いて人事を視る。余すところは常に遊んでいる。遊んでいるところがあつたところがある。ある以上は、写すわれと、写さるる彼との間に一致する

ところと同時に離れている局部があるという意味になる。全部がびたりと一致せぬ以上は写さるる彼になり切つて、彼を写すわけにはゆかぬ。依然として彼我の境を有して、我の見地から彼を描かなければならぬ。ここにおいて写生文家の描写は多くの場合において客観的である。大人は小児を理解する。しかし全然小児になりすますわけにはゆかぬ。小児の喜怒哀楽を写す場合にはいきおい客観的でなければならぬ。ここに客観的というは我を写すにあらず彼を写すという態度を意味するのである。この気合きあいで押しつけてゆく以上はいかに複雑に進むとも

いかに精緻せいちに赴おもむくともまたいかに解剖的に説き入るとも調子は依然として同じことである。

余は最初より大人と小児の譬喩たとえを用いて写生文家の立場を説明した。しかしこれは単に彼等の態度をもっともよくいいあらわすための言語である。決して彼等の人生観の高下を示すものではない。大人だからえらい。えらい見方をして人事に対するのが写生文家だという意義に解釈されては余の本旨に背そむく。えらい、えらくないは問題外である。たゞ彼等の態度がこうだというまでにすぎぬ。

このゆえに写生文家は自己の心的行動を叙する際にもやはり同一の筆法を用いる。彼等も喧嘩けんかをするだろう。煩悶はんもんするだろう。泣くだろう。その平生を見れば毫ごうも凡衆と異なるところなく振舞ふるまっているかもしれない。しかし一たび筆を執って喧嘩する吾、煩悶する吾、泣く吾、を描く時はやはり大人が小児を視るとき立場から筆を下す。平生の小児を、作家の大人が叙述する。写生文家の筆に依怙えこの沙汰さたはない。紙を展のべて思おもいを構かまうるときはしぜんとそういう気合になる。この気合が彼等の人生観である。少なくとも文章を作る上においての人生観であ

る。人生観がしぜんできてきているのだから、自己が意識せざるうちに筆はすでに着々としてその方向に進んでゆく。

彼等は何事をも写すを憚はばからぬ。たゞ拘泥こうでいせざるを特色とする、人事百端、遭逢纏綿そうほうてんめんの限りなき波瀾はらんはことごとく喜怒哀楽の種たねで、その喜怒哀楽は必竟ひっきようするに拘泥

するに足らぬものであるというような筆致が彼等の人生に齎もたらし来る福音きた ふくいんである。彼等のかいたものには筋のないものが多い。進水式をかく。すると進水式の雑然たる光景を雑然と叙のべて知らぬ顔をしている。飛鳥山あすかやまの花見

をかく、踊おどつたり、跳はねたり、酣かん醉すい狼ろう藉ぜきの体ていを写して頭  
 も尾もつけぬ。それで好いいつもりである。普通の小説の  
 読者からいえば物足らない。しまりが無い。漠ぼく然ぜんとして  
 捕捉すべき筋が貫いておらん。しかし彼等からいうところ  
 である。筋とはなんだ。世の中は筋のないものだ。筋  
 のないもののうちに筋を立てて見たってはじまらないじ  
 やないか。どんな複雑な趣向で、どんな纏まとった道行みちゆきを  
 作ろうとも畢竟ひっきょうは、雜然たる進水式、紛然たるお花見  
 と異なるところは無いじゃないか。喜怒哀楽が材料とな  
 るにもかゝらず拘泥するに足らぬ以上は小説の筋、

芝居しばいの筋のようなものも、また拘泥するに足らんわけだ。筋がなければ文章にならんというのは窮窟きゆうくわくに世の中を見すぎた話である。——今の写生文家がこゝまで極端な説を有しているかいないかは余といえども保証せぬ。しかし事実上彼等はパノラマ的のものをかいて平気でいるところをもって見ると公然と無筋をひようぼう標榜せぬまでも冥々めいめいのうちさしつかえにこういう約束をじゆんぽう遵奉していると見ても差支なからう。

写生文家もこう極端になると全然小説家の主張と相容あいひれなくなる。小説において筋は第一要件である。文章に



苦心するよりも背景に苦心するよりも趣向に苦心するの  
が小説家の当然の義務である。したがって巧妙な趣向は  
傑作たるうえに大なる影響を与<sup>あた</sup>うるものと、誰も考えて  
いる。ところが写生文家はそんなことを主眼としない。  
のみならず極端にゆくとつとめて筋を抜いてまでその態  
度を明かにしようとする。

かくのごとき態度はまったく俳句はいくから脱化してきたも  
のである。泰西の潮流に漂うて、横浜へ到着した輸入品  
ではない。浅薄なる余の知るかぎりにおいては西洋の傑  
作として世にうたわるるものうちにこの態度で文をや

つたものは見当らぬ。(もつとも写生文家のかいたものにもこれぞという傑作はまだないようである) オーステンの作物、ガスケルのクランプオードあるいは有名なるドイツケンズのピクウィックまたはフィールディングのトム・ジョーンズおよびセルヴァンテスのドン・キホーテのごときは多少この態度を得たる作品である。しかしまったく同じとは誰が眼にも受け取れぬ。

しかしこの態度が述作のうえにおいて唯一の態度というのではない。またこれが最上等というのではない。たゞこんな態度もあるということを紹介したいと思うのである。

る。近ごろ写生文の存在がようやく認められるにつけて、  
 写生文家の態度はこうであると、いい纏めるのは一般の  
 人の参考になることと思うからこの編を草したまでであ  
 る。

俳句は俳句、写生文は写生文で面白い。その態度もま  
 た東洋的ですこぶる面白い。面白いには違ちがないが、二  
 十世紀の今日こんな立場のみに籠城ろうじょうして得意になつて  
 他を軽蔑けいべつするのは誤っている。かゝる立場からでき上あつ  
 た作物にはそれ相当の長所があると同時に短所もまた多  
 く含まれている。作家は身の状況と天下の形勢に応じ

て時々その立場を変えねばならん。評家もまた眼界を広くして必要の場合には作物に対するごとにその見地を改めねば活きた批評はできまい。読者はむろんの事、いろいろな種類のものを手に応じて賞翫しょうがんする趣味を養成せねば損であろう。余はさきに「作物の批評」と題する一編を草して批評すべき条項の複雑なる由よしを説明した。この編は写生文を品評するにあたってその条項の一となるべきものを指摘してわが所論の応用を試みたものである。

(明治四〇・一・二〇「読売新聞」)





日本文学電子図書館

---

写生文

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 4 卷」 角川書店  
昭和41年 4 月20日 7 版発行

---

日本文学電子図書館